

胡也頻・丁玲・沈從文の 上海に於ける軌跡探訪

小島久代

一九八七年九月二六日から十月三日まで、私は上海・南京を訪れた。そのうち、上海には九月二六日の午後、二七日と十月二日の午後、三日の午前滞在した。

私にとって上海は初めての土地であった。一九四四年から十年間中国に住んでいながら、中国と言えば大連と南京しか知らない。解放後間もない中国の当時の状況では、中国人でも一般に移動は自由にできなかったし、まして敗戦国民である日本人に旅行の自由などありえなかった。今回、私は南京旅行（母校の南京師範大学附属中学創立八十五周年記念式典に招待された）のチャンスに、以前からの宿願——『記丁玲』¹⁾に記されている場所を自分の足で歩き、この眼で確かめたい——を不十分ながらも一部達することができた。

出発前に大雑把に考えていたことは、

- 一、胡也頻、丁玲、沈從文の三人が、一九二九年に創設した「紅黒出版社」跡を訪ねる。
- 二、胡也頻が逮捕される前後の三人の行動軌跡を辿る。
- 三、胡也頻、丁玲は官憲の目を逃れるため、頻繁に転居して

胡也頻・丁玲・沈從文の上海に於ける軌跡探訪

いるが、沈從文との関係で、その場所を確認する。

かように、もっともらしく並べては見たものの、後期の授業がすでに始められている中で、渡航手続きや買物に駆け回りながら、『記丁玲』に登場する道路名、デパート名などを手帳に書き取り、あとは上海市交通図を一枚持っただけの、いたって杜撰な準備であったから、帰国後丸山昇氏の最新著『上海物語』を読み、著者が何種類もの上海の新旧地図をつき合わせて、道路や建物の新旧名をきちんと考証されているのを知り、大いに反省させられた次第である。

ともあれ、私の方はぶっつけ本番で、中国の友人に案内してもらって、実地に調査したささやかな成果を記録しておくことにする。

一、「紅黒出版社」跡の確認、及び「紅与黒」編集に関する丁玲と沈從文の記述について。まず沈從文は、

一種の便利さのために、私たちの住居は、やはり薩坡賽路に決めた。家屋番号は二〇四号だった。「新しい家」と名付けた住居で、三人のうち海軍学生が「紅与黒」と「紅黒月刊」を担当し、丁玲女史と私が「人間月刊」を担当した。私たちが各書店から第二〇四叢書と名付けて出版したのは、全部で単行本が七種あり、海軍学生の其後問題となつた発禁書『光明は、我らの前にあり』²⁾は、この家で書き始められたのだし、丁玲女史の長篇『韋護』もこの家の二階から生れたのである。³⁾

一方、丁玲は次のように言う。

そこで「紅黒出版社」と「紅黒月刊」のどちらもやり始めた。私たちは借金で薩坡賽路二〇四号に、上二階と階下からなる三階建ての家を一棟借りた。今年、私は上海へ立寄った時に行つて見たら、家は元のままだったが、通りの名前が淡水路に改められ、家屋番号もかわっていた。階下は出版所とし、秘書のような仕事をしてくれる者を一人雇ったが、一、二ヶ月すると、彼は恐らくこの出版社の将来があてにならないのを見抜いて、やめてしまった。私と也類、のちに私の母も一緒に二階に住み、沈従文と彼の妹の岳萌は三階に住んだ。一時期は彼の母も来ていて、やはり三階に住んだ。沈従文の兄と弟も短い期間だが住んでいた。

と記し、丁玲は「三人が同居した」という事の弁明を行っているが、それはともかく、この「紅黒出版社」の創設こそが、三人がかつて北京の安下宿で夢見た、自分たちの文学雑誌と作品の出版を実現させる場を提供したのであった。私は何よりもこの若い三人が情熱を傾けたであろう「紅黒出版社」跡を訪ねて見たかった。

うかつな事だが、私は出発前に丁玲のこの「胡也頻」の一文を読みなおしておかなかつたので、薩坡賽路が現在淡水路と改名されていることを知らなかつた。幸い南師附中の先輩である胡思萃女史（高校の国語教師、すでに退職している。）と彼女の友人の許立群女史（会計師、すでに退職している。クリスチャン）が調べてくれた結果、現在の馬当路か淡水路であるらしいことがわかり、上海を離れ帰国する当日の午前中に行つて見

ることにした。前夜の十月二日投宿した虹口公園近くの天鵝信宜賓館から、空港行きのマイクロスバスに乗り、淮海中路（旧霞飛路）と交叉している馬当路の近くで降りてもらった。胡・許両女史が、上海語でお年寄りをつかまえては、馬当路は昔何路と呼ばれていたのか、薩坡賽路はいま何路になるのかを尋ねてくれるが、「わからない」という返事ばかり、そこで、馬当路に平行して走っている、すぐ隣の淡水路の方へ行き、一九六号の家へ入って尋ねた。最初は三十代の若いお嫁さんが応待してくれたが、昔の事はわからないからと、奥へ声をかけてくれる。すると小柄で白髪の上品な老婦人が現われた。彼女は習娟素さんといい、この家の御隠居さんである。一九〇六年生れで、一九三四年から住んでいるという。道路名を尋ねると、確かに当時は「薩坡賽路」と呼び、現在は一九六号だが以前は一二四号だったと、はっきり記憶していた。つまり、その後家屋番号が変わり、当時より七二号多くなっているので、旧一九六号→現二六八号、旧二〇四号→現二七六号になっている筈だといふ。そのうちに、やはり八十歳ぐらいの別の老婦人が現われた。多分この家のお嫁さんが氣を利かせて呼んでくれたのだろう。彼女は任和慶さんといい、今年八十歳、淡水路一九二号にも淡水路は昔は薩坡賽路であったと証言し、その後、英士路→南通路→淡水路と改名したと記憶していた。番号は、道路の東側が奇数、西側が偶数になっていて、北から南へ番号が増えて行く。習娟素さんと任和慶さんに礼を述べ、お嫁さんの案内で

私たち三人は、偶数通りをそのまま南へ歩いて行くと、あった！二六八号、ここはかつて丁玲と胡也頻が一九二八年の春上海へやって来てから、二度目に借りたアパートである。彼らは二八年の後半をここで過した。さらに南へ歩いて行くと、四棟目が二七六号、この二七六号こそ、三人が北京の安下宿で夢見た「ロマンチックな冒険」を、ついに実現させた場所である。

それは半年余りで倒産した出版社にふさわしく、プラタナス（法国梧桐）の緑蔭に被われた静かな住宅地の一角にあった。

五、六軒先きへ行くと復興中路（旧棘斐徳路）と交叉している。斜向いには教会が見えた。三人はここに恐らく一九二九年一月から八月まで、階こそ違うが、同じ屋根の下で、ともに暮し、共同の理想のために若い生命を燃焼させていたのだ。

この通りは、ほぼ同じ型の三階建ての家屋が横一列に連らなっている集合住宅地である。奥行きがどれ程か、内部がどうなっているかは、外からは窺い知れなかった。外見だけをスケッチすると、入り口の戸は観音開きで、上半分はガラス、下はレンガ色の木製の戸である。ガラスには縦横三本の細い棧が通り、中央に縦三つ、花模様棧と同じ太さの木で細工され、左右対称に描かれていた。外壁は、赤レンガにモルタルが吹着けてあるようだが、ところどころはげ落ちていた。一階と二階の間には庇が五〇センチほど出ている。観音開きの窓が二組見える。二階と三階の間にも庇が張り出して、鉢植えなどが置いてある。三階は少し奥まって作られているようである。一九六号の家について、沈從文は「家賃が計三十一元、賄費が計十

六元」と記している。現在の家賃は聞き忘れたが、私が九月二十六、二十七日の両日泊めていただいた、振興大樓の家賃が、一フラット三十元とのことだった。戦後四十数年このかた、地価や物価の高騰に慣らされてしまった日本人の感覚からすると、五十年前と同じ家賃など信じられないのだが、海を一つ越える

と、かように違うのである。ついでに、「紅黒月刊」の母体となった「紅与黒」の編集について、沈從文、丁玲の記述を比較して、いささか私見を述べて見たい。まず沈從文は次のように述べている。

上海の中央日報の編集長彭浩徐（本名は彭学沛——筆者注）が海軍学生を訪ねてきて、その新聞の副刊の編集をしないかと持ちかけた。月二百元以上の原稿料が入り、十分配分できる。三人はしばらく相談して、この件を引き受けることにしてから、この刊行物を「紅与黒」と名付けた。この「紅与黒」がのちの紅黒雑誌の母体となった。

一方、丁玲は前述の「胡也頻」で次のように回想している。ちょうど、彭学沛が上海の「中央日報」の編集長をしていて、彼は「現代評論派」だった。沈從文が彼を知っていて、沈從文の推薦で、胡也頻が副刊を編集することになった。也頻は当時新聞の状況を完全には理解していなかった。ただ、「現代評論派」であるとは思っていたのだ。それに、一九二六年、二七年私たちが北京で困窮していた時、北京の「京報」はすでに停刊（あるいは移転）していて、「晨报」と「現代評論」だけが残っていて、北京に残っている

作家たちにとって、時にはなにがしかの救済となり、わずかばかりの原稿料だが、どうにか口すぎをすることができた。その頃胡也頻は毎月四、五元か七、八元の原稿料が入り、母が毎月送ってくれる二十元の生活費の不足を補っていた。胡也頻は「現代評論派」ではなかったが、沈従文の関係から「中央日報」へ行って副刊の編集に当ることを承知し、二、三ヶ月副刊「紅与黒」を編集した。毎月大体七、八十元の編集費と原稿料を手にすることができた。我々のいままでの生活水準からすれば、これは全く想像し難いことであった。(傍点は筆者)

この二文を読んで気が付くことは、(1) 原稿料、編集費の金額の差が大きすぎることであるが、これは丁玲が一人分の額を、沈従文が三人の総額を記したと解釈すれば、計算が合う。後に引用する沈従文の記述からは、三人が共同で原稿を書き、編集をし、胡也頻が代表者として新聞社に出向いていたと理解される。それでこそ、「紅与黒」が「紅黒月刊」の母体となったという記述が内容を持つてくるし、事実三人が揃って「紅与黒」に書いていたことは著作目録から証明される。とすれば、丁玲が胡也頻一人の報酬しか書かなかつたのは、丁玲自身が中央日報から稿料を受け取ったことを遡求されるのを八〇年の時点では、まだ慎重に避けていたのではないかと推論される。(2) 「現代評論」について言えば、沈従文は二五年から二八年まで、計四一期に、胡也頻は二六年から二八年まで、計二〇期に作品を発表していて、従文が也頻の二倍登場しているが、こ

れは従文が連載小説を執筆していたからである。ここでは、むしろ、のちに左連に加盟した也頻が「現代評論」に二〇篇も書いていたことの方が目を引く。丁玲が言うように彭学沛が現代評論にかかわる人物だとすれば、常連寄稿者だった従文、也頻の二人に副刊の話をもちかけたとして一向に不思議ではない。

(3) 傍点部分は別のテキストによれば、⁽¹⁾也頻は当時「中央日報」が国民党のものだとは理解していなかった。

とある。丁玲は、也頻が中央日報が国民党の機関紙であること⁽²⁾を知らずに、「沈従文の推薦で」、「沈従文の関係で」やむを得ず引き受けたとして、責任をすべて沈従文に押しつけんばかりの書き方である。この記述から、私は丁玲の、左連五烈士の一人である胡也頻像を疵つけたくないという配慮と、自己弁護の姿勢を感じるのだが、どうであろうか。

中央日報社は、通称「新聞街」と呼ばれていた望平街(平望路)にあった。それは現在の福州路にあり、西藏路と浙江中路にはさまれた短い通りで、附近には労働劇場や王保和酒家がある。⁽³⁾

沈従文は次のように記している。

三人が協力してこの刊行物を維持して行くことを承知したからには、海軍学生が代表者になってやって行くことになった。海軍学生は毎夜望平街の角の古い建物へ行っては、歩くとギンギンと音のする階段を、いまにも落ちそうな三階まで上って行って、事務室の一角に坐り、編集済みの原

稿を提出して、編集長が本紙の社説を書きながら紙巻きタバコを吸うのを眺め、副刊の最終ゲラを見終るまでずっとそこに詰めていて、それからやっと浩徐の大きな車で家に帰ってくるのだった。⁽¹³⁾

「紅与黒」は、一九二八年七月に創刊して同十月三十一日第四九期で停刊している。

紅黒出版社は胡也頻の父に借りてもらった一千元を資金に、翌二九年一月から始めて、「紅黒月刊」を第八期まで、「人間月刊」を第四期まで出版、その他単行本を七種出版したが、借金を残して倒産した。

二、胡也頻逮捕前後の三人の行動軌跡

一九三一年一月、沈從文は武漢大学から上海に戻ってきていて、北京路の清華同学会の寄宿舎に逗留していた。胡也頻と丁玲は呂班路（重慶南路）万宜坊六十某号に住居を移していた。二九年夏、紅黒出版社が負債を残して倒産してから、沈從文は呉淞の中国公学、さらには武漢大学へ教えに行っていた。胡也頻は山東の済南省立高中へ教えに行ったが、そこで文学研究会を作り、マルクス主義やソ連の文芸理論を宣伝し、学生運動にかかわったため、当局から逮捕状が出され、三〇年五月には上海へ逃げ帰り、環龍路（南昌路）某術三三号に住んでいたが、三一年一月には呂班路に移っている。也頻は三〇年五月には左連に加入し、執行委員に選出され、工農通信委員会の主席にもなり、十一月には共産党に入党して地下活動をしていたので、

胡也頻・丁玲・沈從文の上海に於ける軌跡探訪

当局の逮捕の手から逃れるために転々と住居を変える必要があったし、また常に尾行を警戒しなければならなかった。

也頻は從文の宿へやって来て、そこから呂班路のアパートへ帰る時に、

裏口から下りて行き、博物院路（虎丘路）に出て、そこからまた北京路にまわって南に向い、外灘をすぎ東へ向う。⁽¹⁴⁾

という遠回りの道を選ひながら、フランス租界の家へ辿りついている。逮捕される直前の一月十一日から十七日まで、從文は也頻、丁玲と毎日顔を会わせている。丁玲は生後二ヶ月の赤ん坊の世話に忙しかったが、

三人が相談したのは、「紅黒」をどうやって復刊すべきか、どういう方法でこの刊行物を支え、中断させないようにするか、またこれをどのような体裁で世に出すのかということであった。⁽¹⁵⁾

と沈從文は記している。

十六日、從文は彼らを誘ってカ爾登（長江劇場）へ映画を見に出かけている。見たのは「生命」という題の洋画であった。映画館を出て、静安寺路（南京西路）を西へ向って歩いた。也頻は江西へ出発する日が迫っていたし、官憲の手が伸びていて、近くで逮捕者が出たことから、移転を考えていた。

十七日、也頻は從文を訪ね、二人は也頻の二房東（又貸しの家主）の一人息子の葬式に送る輓聯用の白布を買いに行った。

北四川路から南に向って歩いた。ちょうど改装工事中の恵羅公司前まで来ると、彼は先施公司へ行つて、輓聯にする

白布を買わなければと言つて、手を伸ばして私をひとつつねり、私にちよつと目くばせして、目をほそめて笑いなながら、大通りから横へそれて行つた。⁽¹⁶⁾

この惠羅公司は、現在「上海二輕貿易中心」になつていて、南京東路に四川中路が交叉している北東に位置し、四川中路をへだてて西北には「上海民族楽器一廠營業部」が並んでいる。

一方、先施公司は四川中路から西へ五本目の浙江中路が南京東路と交叉している西北に位置し、南京路をはさんで南には永安公司があつた。先施公司は現在「上海時裝公司」、永安公司は「上海第十百貨公司」になつてゐる。惠羅から先施まで約一キロ、歩いて十五分ぐらいの距離である。従文は也頻と別れ、四馬路（福州路）で昼食をとり、三時頃フランス租界の彼らの家へ行つたが、丁玲と赤ん坊だけで、也頻は帰つていなかった。

従文は不吉な予感を覚えるが、丁玲は彼を憶病だと笑う。従文は彼女が也頻の身に迫つてゐる危険を知らず、樂觀的すぎると腹を立て、一旦は宿へ戻るが、夕食後また来て見る。だが、也頻の姿はなかつた。

十八日、従文は再び彼らの住居へ行つて見るが、依然として也頻の姿はなく、捕まつたに違ひないと思つた。従文は直ちに、フランス租界から閘北（上海北部の日本租界）へ、閘北から静安寺（上海西部）へ、静安寺から再び万宜坊へと、ほとんど上海の東西南北を駆けめぐつて也頻の行方をさがした。午後になって某処から也頻がすでに捕まつたとの噂が入つた。七時頃、従文が万宜坊から北京路の宿舎に戻つて来ると、ある瘦せ

た男が彼を待つていて、メモを渡す。

「休、いまいいことになつてしまった。昨日君の所で話をしてから、部屋を出て先施公司へ行つたのだが、そこで女友達に会い、友人に会いに東方旅館へ連れて行かれた。ところが、なんとそこで奴らに間違つて逮捕されてしまった。どうか君から胡先生と蔡先生に、なんとか方法を講じて僕を釈放してもらおう頼んでほしいのだ。呉経熊弁護士に、僕が龍華へ移される前に訴訟をおこしてもらおう頼んでくれ。君は僕のことによくわかつてゐるだろう。すべて至急やつてくれ。一日でも長びくと、やっかいなことになる。家内には心配しなくてもよいと君から言つてやつてほしい。僕のこととは絶対遅れてはだめだ。遅れると事態は變つてくる。僕はとても焦つてゐる……崇軒⁽¹⁷⁾」

胡也頻は、ソビエト代表大会準備会の機関で、国民党官憲によつて逮捕されたのである。それから後の従文は、赤ん坊を抱えた丁玲を助け、胡適、蔡元培、徐志摩などに援助を求め、也頻釈放のために八方手を尽した。邵力子や陳立夫に会うために南京へも二度出向いてゐる。また、胡也頻が処刑されてから、丁玲は赤ん坊を湖南省の母親に預けに行くが、その旅にも、従文は丁玲と夫婦を装つて、つき添つて行き、無事也頻の遺児を送りとどけたのである。丁玲は、也頻逮捕直後は友人の李達、王会悟夫妻の西門路（自忠路）西門里の家に匿つてもらつた。西門路は棘斐德路（復興中路）のすぐ北二百米ぐらいの所を東西に走り、呂班路と丁字に交つてゐる。

湖南から上海に戻った後は丁玲は環龍路の三階建ての一室に一人移り住むことになる。西門路が呂班路とT字交叉している地点から北へ一五〇米ほど行き、西へ折れると環龍路（南昌路）になる。

以上見てきたように、胡也頻、丁玲の上海での足跡を辿ると、二八年から三一年までは、大体フランス租界のフランス公園（復興公園）の近くを転々と移り住んでいたことになる。一方、沈従文は二七年から二九年八月まで上海に住み、一時は胡也頻、丁玲と同じ屋根の下で暮したこともあるが、二九年秋から三〇年は、呉淞、武漢に移っている。三一年上海に戻ってきたのは紅黒出版社再興のためであったが、胡也頻の逮捕、処刑という不測の事件に巻き込まれてしまう。彼は左連とは対立していた新月派に近い立場に立ってはいしたが、親友としてまた一人の作家として、あらゆる手段を講じて胡也頻救出に奔走した。のちに丁玲に「政治がわからない」と評されるが、実際は表立って活動できなかった左連のメンバーに替って精一杯のことをやったと言えるだろう。

三、沈従文と胡也頻、丁玲の住居の位置関係

年月	沈従文	胡也頻・丁玲
一九二七	仏租界善鐘路（常塾路）の中二階	北京 杭州西湖
二八年春	仏租界善鐘路の中二階から一フラット	二人で沈従文のアパートに居候

胡也頻・丁玲・沈従文の上海に於ける軌跡探訪

年月	沈従文	胡也頻・丁玲
二九年一月	薩坡賽路二〇四号 （淡水路二七六号） 呉淞の中国公学で教える	へ移る 杭州西湖葛嶺 西湖靈隱石筍峰 上海新民邸
三〇年五月	武漢大学で教える	仏租界永裕里十三号 三楼
三一年一月	北京路（北京路） 清華同学会	薩坡賽路一九六号 （淡水路二六八号） 薩坡賽路二〇四号 （淡水路二七六号） 也頻は山東省の済南省立高中へ。丁玲は薩坡賽路一九六号。一ヶ月後済南へ。
三一年二月	北京路清華同学会 呂班路万宜坊附近に移り、妹の岳萌と住む	環龍路（南昌路）某術三三三号 呂班路万宜坊六十某号（重慶南路の鄒韜奮記念館のある弄堂） 西門路（自忠路） 西門里の李達宅に丁玲身を匿す。のち沈従文兄妹の所に身を寄せる
三月中旬	丁玲と胡也頻の遺児を湖南省常德へ送り届ける	沈従文に付き添われて湖南省常德へ
四月	青島大学へ	環龍路

後記：今回の実地調査に当っては、盛毓安氏（「收穫」出版

部主任)、呉晏女士、胡思萃女士、許立群女士に大変お世話になった。なお訳文は福家道信訳「記丁玲」(V I K I N G 第三一九一三三九号)と中島みどり編訳「丁玲の自伝的回想」(朝日選書)を参考にさせていただいた。誌面を借りて深く感謝の意を表す。

注

- (1) 沈從文著 一九三四年初版 上海良友圖書公司出版。
ここでは三九年に修正され、四〇年に出版された普及版を使用した。
- (2) 胡也頻のこと。本名は胡崇軒。一九〇三年生れ。三一年二月七日、国民党官憲の手で銃殺された。左連五烈士の一人。天津大沽の海軍予備学校に在籍したことがあるのでつけられた。
- (3) (7) (13) (14) (15) (16) (17) 『記丁玲』注(1) 参照。
- (4) 丁玲「胡也頻」一九八〇年十月執筆『生活・創作・時代の魂』(湖南人民出版社一九八二) 所収
- (5) 丁玲「ある真実の人の一生」一九五〇年十一月十五日執筆『胡也頻選集』(上) 所収
- (6) 国民党中央の機関紙、一九二八年二月創刊、当時は南京で出版された。
- (8) 一九二四年十二月〜二八年十二月。主な執筆者は、王世杰、高一涵、胡適、陳源、徐志摩、唐有壬など。国民党右派の胡漢民の資金援助で創刊された。女子師範事件で魯

迅ら語絲派と論争したことは有名。

- (9) 一九一八年十月五日〜二六年三月。邵飄萍が北京で創刊。二四年孫伏園が副刊を発刊、革新的な新聞。

- (10) 一九一六年八月〜二八年六月。北京で創刊された梁啓超ら研究系の機関紙。一九年李大釗が副刊を発刊。二五年徐志摩が副刊の編集を引き継ぐ。

- (11) 丁玲「胡也頻」一九八〇年十月執筆『胡也頻選集』(上) (福建人民出版社 一九八一、七)

- (12) 胡思萃女士から筆者宛一九八七年十一月三日付けの書信による。

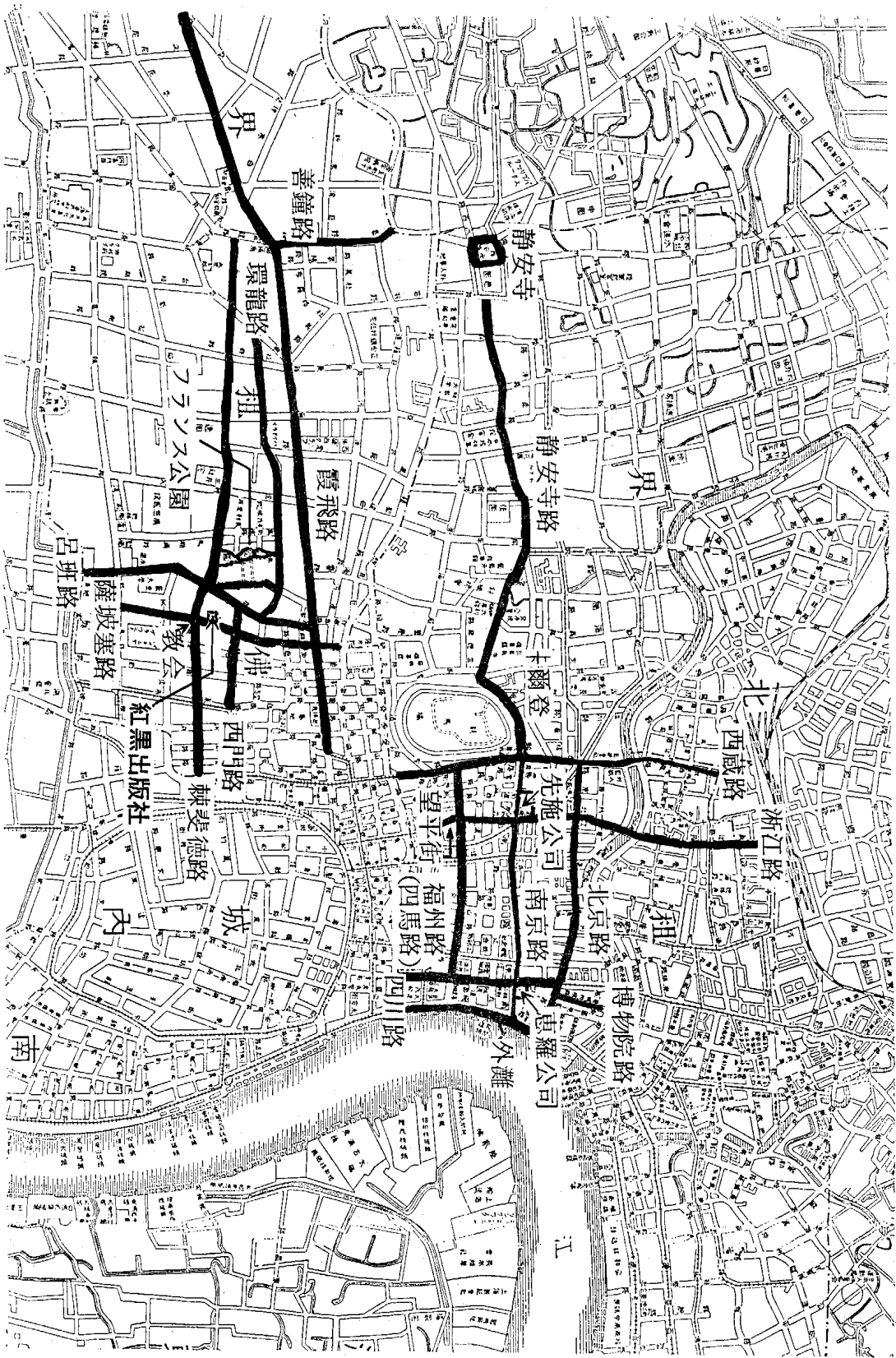
- (18) 一八八二年〜一九六七年十二月二五日。浙江省紹興県出身。日本に留学して新聞学を学んだ。一五年「民国日報」を創刊、編集主任、「覚悟」副刊の編集も兼任。国民党親ソ派、三一年当時は中国公学、復旦実験学校校長を務めていたので、沈從文は胡適を通じて頼んだのであろう。三六年西安事件の時には抗日統一戦線成立のために尽力する。四〇年〜四三年駐ソ大使。四九年三月国共和平会談国府代表として北京へ行くが、そのまま北京に留まる。五四年〜六七年全国人民代表大会常務委員会委員など数々の要職を歴任した。

- (19) 一九〇〇年生れ、浙江省呉江県出身。陳其美の甥。陳果夫の弟。米國ピッツバーグ大学卒業後、蒋介石の国民革命軍総司令部秘書長となった。三一年国民党の組織部長、兄の果夫と二九年上海に反共団体C・C団を組織し、共産

党弾圧の指揮をとった。

(20) 一八九〇年～一九六六年、湖南省零陵県出身。社会科
学者、東京帝国大学卒業。共産党の創設に加わったが、の
ち社会科学の研究に専念。『中国産業革命概観』、『中国関
税制度論』などのほか、安部磯雄、河上肇等の著作を翻
訳。「実践論」、「矛盾論」等の解説がある。

(21) 注(5)を参照。



1930年前後の上海（太線は関連街路）